



調律師 鈴木均が語る

実のところ、初めから調律師を目指してこの道に入ったわけではありません。親は農業で音楽に関係なく、家に楽器もなかった。今も家にピアノはなくポロンポロンと弾ける程度です。

でも音楽は好きでした。

中学生の頃にギターを買ってもらい、チューニングを覚えしました。高校の吹奏楽部でフルートに出合っただけで音楽大学を目指すも、周りの差にがくぜんとし、受験前に諦めました。

「何とか音楽にかかわる道をと」と、高3の3学期に受験のガイドブックで目に

## 「家庭回り」に内心うんざり

入ったのが国立音大の調律科でした。同級生にはピアノがめちゃうくちやうまいやつ、逆に僕より下手なやつもいました。自分で弾けなくても、耳が良くて感性があり、飽きっぽくなく、器用ならなおいいものです。

今ほどコンサート自体がないので、コンサートチューナーなんか雲の上の存在でした。楽器メーカーにはベテランが大勢いて、若造の入るすきもない。「とりあえず飯が食えればいいや」くらいの気持ちで地元に戻って家庭用ピアノの調律の仕事に就きました。

1960年代はピアノが飛ぶように売れた時代で、仕事はあふれるほど。新しい団地の一つの棟の各階で3台調律して一日が終わった日もありました。

正直うんざりしていました。先輩たちの「手抜き仕事」ばかり見ていたからです。昔から社寺建築のような世界には「神さま」がいたけど、名古屋の調律師にはいなかった。夢も希望もなく、調律は片手間に木工芸にのめり込んで全国公募展で初入選しました。

35歳を過ぎて子どもが小さかった頃、海外の高級ピアノを扱う楽器商社に就職した同級生から「名古屋のピアノの評判が悪いから研修に来ないか」と誘いがありました。物見遊山で出かけるのと、カルチャーショックが待っていたのです…。

(聞き手・南拡大朗)



「家庭回り」の調律よりもめり込んでいた木工。「この経験が調律で生きることになる」

### 修業時代①